

二人いるとき

宮本百合子

青空文庫

習慣になつてゐるというだけの丁寧なものごしで、取次いだ若い女は、「おそれりますが少々おまち下さいませ」と引下つて行つた。

土庇が出でいる茶がかつた客間なので、庭の梧桐あおぎりの太い根元にその根をからめて咲き出でいる山茶花さざんかの花や葉のあたりを暖かく照らしてゐる陽は、座敷の奥まで入つて来ない。多喜子は、座布団の上で洋装の膝をやや崩して坐りながら、細い結婚指輪だけはまつていの手をもう一方の手でこすつた。床柱も、そこの一輪差しに活けられている黄菊の花弁の冷たささえも頬に感じられて来るような室の底冷える空氣である。

暫くぽつんとしていると、廊下のあつちの方で、

「お客様にお火をさしあげて？」

と云つてゐる尚子のきき馴れた高い声がした。

「あら。どうして？　すぐ持つて来て下さいよ、お茶もね」

区切りのドアが開くと一緒に尚子の言葉がすぐそこに響いた。

「失礼いたしました」

そこへ出ていた坐布団の上へ両膝をいちどきにおとすように尚子は女学生っぽい挨拶の

しようをした。

「御免なさいね、お火もないところでお待たせして」

多喜子は、大きめの手提鞄をあけて仮縫いにかかっている服をとり出した。

「すぐなさいます?」

「もう少しあつたまつてからにしようじゃないの。——でも、……おいそぎになるの?」

「いいえ、そうでもないんですけれど……」

「じゃあ、ゆつくりなさいよ。きようはうちでも珍しくすこし風邪気味でお休みだし——

……

一二度麻雀に誘われて遊んだりしたことのある良人の幸治のことを云い、尚子は、「でも、私、ほんとにあなたはお偉いと思うわ」

丸い柔かいウエーヴのよく似合う顔立ちにいつわりのない色を浮かべて云つた。

「よくお仕事はお仕事と、いつもきつちり事務的にやつていらつしやると思うわ。私たち

なんかお友達がよつたらもうおしまいよ、つい喋つちまつて

「あら。私たちだつて、随分だらしないときもありますわ」

「そうかしら。拝見したことないわ」

困ったような、はにかんだような笑いかたをして多喜子はちょっと居住まいをなおした。関係から云つても、同級であつた桃子の兄嫁のところへ、ただ洋裁の仕事先として多喜子は来ているのであつた。

仮縫いの方を着て尚子が立つている背中の皺にピンをしているところへ、襖の外から、「いい？」

声をかけて、桃子が入つて來た。

「ちは」

学生時代のまんまの符牒のような挨拶を、ピンを唇で押えているので口の利けない多喜子に向つてかけ、桃子はすこしはなれたところからぐるりと尚子の立ち姿を見まわした。

「いいじゃないの、なかなか」

「よかつたわね、やつぱりこのカラーの型にして」

「そりやそうさ、お嫂さんたらVにするなんて。そんなのないわ」

裾の長さまできめてから、多喜子は自分も立ち上つて、出来栄えを眺めた。

「思つたよりよかつたこと——お袖のところいいかしら？ つれません？」

「——いいようよ」

桃子が、

「原さん、すっかり板についやつたなあ」
感歎するように云つた。

「本ものになつちやつた。これでお顧客どくせきさえふえりや堂々たるものだわ」

「ベビー服で降参するだろうつて云つた人だあれ。せいぜい紹介してよ」

ピンを肌に刺さないように、そしてまた折角としたピンを落してしまわないようにと、
むき出しの両腕を揃えて頭の上へ高くあげ、それなり半身を前へかがめている尚子の頭の方から、仮縫いの服を脱がしかけていると、廊下を、ゆっくりした足どりのスリッパの音
が近づいて来た。尚子が耳敏く、

「お兄様じやない？」

桃子に、

「ちよつとまつて頂いてよ」そう云つているうちに、

「いいですか？」

すこし改つたような咳払いをして幸治が外から声をかけた。

「だめよ、今入つちや。まだ猫に紙袋よ」

笑いながら桃子が大きい声を出した。

「ほう」

また咳払いをする声がする。

「はい、どうぞ」

「やがて尚子が自分から幸治のために襖を開けてやつた。

「や、しばらくでしたね」

裕の対を着て、きつちり髪をわけている幸治は、武骨っぽい Izunagi した体つきに似合
わない軟かい笑いをたたえて、テーブルのところへゆつくりした動作で坐つた。

「随分しばらくお目にかかりませんでしたね」

「ついかけちがつて……」

多喜子はほかに云いようもないものであつた。

「おかげなんですって？」

すると桃子が、

「やー、お兄様」

とはやし立てた。睨むような眼差しをするうちにも尚子は笑いを抑えられない風である。

飲みすぎが、怠けぐらいのところらしい幸治がにやにやしながら、「貧乏ひまなしでやつてていますとたまには、病気もなかなかいいところがあるですよ」エアシップの灰をおとしながらしかつめらしく云つた。

「妙なもので公然と欠勤した日の味はまたちがいましてね、勤人根性ですね」増田の父親の経営している会社の子会社へ、若専務として幸治はオーステインで通つているのであつた。

苦労のない三人がストウブのまわりで顔をつき合わせて何や彼やと、やや倦^うんじたところへ多喜子が来たのも、小さい新しい一つの刺戟であるといいうらしい暢^うびやかな、どちらえどころのない雰囲気である。

多喜子が帰るしおを計つていると、幸治が案外の敏感さで、

「まあよろしいでしよう」

ととめた。そして、冗談と十分対手に分らせた物々しさで、

「どうだい、ひとつ多喜子さんに僕たちが何に見えるか鑑定していただこうじやないか」と云い出した。

「何に見えるつて——何なの？」

桃子の顔を見ると、桃子は火鉢のふちへもたれかかつて妙に口元を曲げたなり火箸で灰をいじついて聞えないようにしている。

「実はきのうは、僕たちの記念日でしてね、ひとつ趣向をかえて御飯でもたべようということにしたんです、或る家でね。細君なのか、細君でないのか、という微妙なところをやつて見せようというのに、役者が下手で駄目なんです。僕がわざと女中の来たときに、あつちのお帰りの時間はいいんですかとか何とか盛んにやるのに、この奴つたら、……」

尚子は、ふふふふと笑つて、

「だつて——」

と云つたが、いかにも屈托ない様子で、

「あの女中さん、一向けろりとしていたわね」

それが寧ろ不思議らしい調子である。

さつきから黙つていた桃子が頬つぺたに散りかかる髪を払いのけるように火鉢から頭をあげて、

「とにかくお兄様は心臓がつよいわよ」

何処か突かかるような云いかたをした。

「ところで、多喜子さんにはどう見えますか、夫婦にしか見えませんか」

「だって——ほかにどう見えたらいんでしょう」

「第三の人物を仮定して見ても駄目ですか？」

ほかならない結婚を記念する晩に、わざわざ自分の妻に不貞な妻としての役割をさせ、自分をも不貞な良人と仮定した位置において食事を一緒にする好みとは、何ということなのであろう。女中がけろりとしていたとか何とか、罪のない眼附を良人の顔の上へ注ぎながら云つていた尚子の丸い顔を思い出すと、多喜子はそこにああいう日暮しの人々の結婚生活というもののかげに潜んでいる非常に恐ろしい、唾棄するようなものが、尚子にも気附かれずのぞき出しているのを感じた。帰りかける多喜子を送つて玄関へ出て来た幸治夫婦が、計らずものの拍子でくつつき合つた互の肩をそのまま並べ、上機嫌で、

「さようなら」

「じゃまた、御ゆつくりね」

と晴々した声を揃え、多喜子に向つて手をふつて別れを告げた彼等のもつれあつた姿目に泛べて、一方に何か全く普通の娯楽でもあるかのように話されたそのことを考え合わ

せると、多喜子にはそういう人々の生きている感情の奇怪さが迫った。この頃はいつ召集があるかもしれないような事情のなかで、自分たちが本気でそれを守り高めようとして暮している夫婦生活の平凡な眞面目さが、何かに嘲弄されているような嫌な気もするのであつた。

北向きの三畳が多喜子の家では仕事部屋になつていて、東の高窓際にミシンがおかれ、仕事テーブル、アイロン台と、順に低い一間の明り窓に沿つて並んでいる。赤い三徳火鉢に炭団たどんを埋めたのを足暖炉代りにして、多喜子はもつて帰つた尚子の仮縫いの服の仕事をしていたのであつたが、暫くするとそれをやめてテーブルへ置いた。重くてつるつるとしたその絹服の感触が幸治たちの生活の感覚をひっぱつているようで、いじつている気がしなくなつたのであつた。

多喜子は腕時計を見て、椅子をおり、台所からもう一つ同じような三徳をもつて來た。茶の間の火鉢からおこつてゐる炭団をうつしていると、格子の鈴が鳴つて、

「いらっしゃる？ あがつてよくつて？」

カタ、カタと足からぬがれて三和土たたきに落ちる左右の靴の踵の音をさせて、好子が入つて來た。

「——小枝子さんもまだだつたの？ 私おそくなつたと思つていそいで来たんだけれど……」

…

毎土曜の午後、多喜子は洋裁の稽古をしているのであつた。

「狸穴まみあなからだから、途中にかかるのよ」

「きょう、お宅は？ やっぱりおそいの？」

「夕飯まで図書館へまわつて来るんですつて。この頃あのひと一生懸命だわ、呼ばれないうちにせめて今やつている分だけでもまとめたいって」

参考は或る私立大学の講師をしている傍ら、近代英文学の社会観とフランス文学のそれとの比較をテーマに研究しているのであつた。

「うちの伍長さんだつて危いもんだわ」外套のボタンをはずしながら好子が云つた。

「落着かないわねえ。何万人もが私たちみたいな心持でいるんだと思うと、夜中に目が醒めた時なんかとても変な気がするときがあるわ」

秋ごろ戦死した或る新劇の俳優の噂が出た。

「でも私秋子さんをまだ幸福な方だと思うわ、亡くなつた旦那様の仕事を守つてやつて行くちゃんとした俳優としての才能が御自分にもあるんですもの」

「そう簡単なものかしら……」

参吉と話したときもそうであつたが、多喜子には、別な内容で秋子という女優のひとが経て行かなければならぬであろう苦難の複雑さが深く思いやられるような気がした。

「一緒に仕事をしていて、しかもあるの方たちみたいに、どつちかつて云うと旦那様が指導的だった名コンビは、私は片方に死なれるのはこわいと思うわ。打撃がひとより深刻ですもの。才能っていうか、生きる意力っていうか、そういうものがよっぽどなければ、その深刻な打撃を芸術と生きる態度の上のプラスにするのがむずかしいもの。大変な努力だろうとしみじみ思うわ」

好子の良人は或る機械工場に勤めている技師であつたが、この夫婦の生活の色合いは、例えば今も好子が、

「そりや、居なくつたつてどうにか食べては行けるにしたつて、ねえ」

と自分の心持を云いあらわすようなところで、多喜子たちと違つてゐるのであつた。多喜子は三畳の方へ来て、テーブルの上へ型紙をひろげながら、

「ねえ、あなたのところはどう？ 私たちこの頃、また随分いろいろ話し合うようになつたわ。昔左翼のひとでね、夫婦の間で決して翌日まで喧嘩をもちこさない約束で暮してい

る人がいたつて、その気持やつと今わかるようだわ」

好子にしろ、洋裁をやり始めたには、やはり勝たずば生きてかえらじといふ歌を流行歌のようにはきいていられないものがあつてのことなのである。

心の内から堰あふれて来るものに動かされている眼の表情で、多喜子は、

「好子さん、あなた、詩人に注文がない？」

と云つた。

「私あるわ。もつと本当に私たちが大事なものを出してやる心持をうたつた歌が欲しいわ。勇ましく戦つてくれ、そして、成らうことなら生きて還つてくれ。どんなにこの心は強いでしょう。そして皆の願いがそうなのだとと思うわ。そういう真個ほんとに情のあふれた落着いて勇ましい励ましの歌が欲しいわねえ」

好子は、型紙のつくりかたをやつてているところで、ハトロン紙の隅で計算をしては物指で作図をしている。テーブルの上へ拡げた紙へ胸ごとのしかかる姿勢で好子はおだやかに云つた

「山田は時々戦死するかもしれないよと云うのよ。そんなとき、私、それはそうねと云つて、それでもやつぱり何か確りしつかしたものを見つめると、一人の間に感じて落着いていられるようになり

たいと思うわ」

やがて小枝子が、寒いなかをいそいで歩いた薄赤い滌瀬とした顔でやつて來た。

「御免なさい、おくれて。出征の人で電車がこんでこんで……」

事務員らしいきばきさで、小枝子はすぐ仕事机の隅の風呂敷包みをひろげ、三尺の押入れを衣裳箪笥まがいにしたところに吊つてある縫いかけのスーツの上着を出した。小枝子が来るようになつてもう一年以上経つた。事務員では何年つとめていても技術がつかない。その自動車会社がしつかりしているので目前の月給は悪くないのであつたが、小枝子は或る時不図そのことに気がつくと不安になつて、新劇の或る女優の後援会で知りあつた多喜子のところへ洋裁を習いに来はじめたのであつた。今では、ひとのものも縫えるところまで腕がついているのである。

独身で勤め人の小枝子が加わると、話題もおのずからひろがつて、三人の女は手や足先を動かしながら、その後援会に二人が加わつている女優の演じた田舎の庄屋のおかみさんが粹すぎたなどという話も出た。仕上げミシンの急所のところで、多喜子が、

「あ、ちよつと、そこはこうした方がいいんじやないかしら」

自分でミシンを踏みかけたら、小枝子が、

「私、下ふみますから……」

多喜子を軽く押しのけるようにした。

「あら。大丈夫なのよ、今は。自分の仕事だつてしている位なんですもの」

「ええ、でも。今度は本当にうまくお生みんならなけりやいけないんですけど」

何か思いがけなかつたような女同士の温い心づかいが小枝子の声や身ぶりの中に感じられて、多喜子は却つて言葉がつまつた。去年初めて妊娠したとき、多喜子は自分の健康に自信をもちすぎていて、テニスをしたり自転車にのつたりしたために流産をした。小枝子はそのことをさして いるのであつた。

一仕事すんだくつろぎで番茶をのんでいると小枝子が、

「きょうの『女の言葉』よみました？」

と二人に向つてきいた。

「朝日のでしよう？　まだ見なかつたわ、何か出ているの？」

「ある女のひとが投書しているんですけどね、電車のなかで私たちみたいな女がドストイエフスキーやみたいな厚いむずかしいものなんかをよんでいるのを見かけるが、果して彼女達はどこまで理解してよんでいるのだろう、つて云うんです。電車の中なんかでは軽い

雑誌とかパンフレットでもよむべきだつて、その女のひとは云うんです」「何てわからないんだろう！　そのひと」多喜子が、怒ったように小枝子に振向いて訊いた。

「生意氣だつて云うの？」

「さあ。——とにかく机に向わなけりやドストイエフスキーなんぞわからないつて云うんでしょう」

「変なのね、私たち誰だつて電車の中でよんだ学課以外の本のおかげで、どうやら読書力がついたんだわ」

「そのひとには、往復の電車で本をよめるというのがどんなに勤めているもののよろこびと慰安だか分つてないんですね、きっと

いくらか難詰の声で小枝子が云つた。そして、

「何しろ、現にこういうのがあるんですからね」

自分のメリッス包の下にカヴァをかけてもつている大版の「緋文字」をちらりと見せて小枝子はユーモラスに首をすくめて笑つた。

「何だか苦しかつた。どつかに今朝の『女の言葉』を見た人がいて、ははん、あれだな、

なんて見られているんじゃないかと思つて」

「まさか！」笑い声の中から、小枝子が、

「現実に、ひる間つとめて家へかえれば疲れているんですからね」と云つた。

「机にきちんと向わなければ読めないんだつたら、私たちのようにして暮しているものは結局一冊の本だつてよめやしないと云うことになるんです」

顔の内側に明るく燃え立つているものがあるような表情で小枝子はそれを云うのであつた。

多喜子たちが卒業した女学校の専門部で文明史を教えていた教師の一人が、イタリーの方へ交換教授のようにして行くことになり、その送別会があつた。出席した同級の幾人かは、どちらかというと多喜子のように友達に会いたい方が主で、こつそりこちらのテープルの端で、

「私戸田先生イタリー語がお出来んなるなんてちつとも知らなかつたわ」

「日本語を教えにいらつしやるんだつて。だからイタリー語は出来なくたつていいんでしょ

そんなことを、凡庸であつた教授ぶりへの感想をもこめて囁きあつてゐる連中がある。

形式ばつた茶話会がくずれてから、多喜子はヴエランダのところで煙草をすっている桃子のそばへよつて行つた。

「お嫂さん、小包で送つたりして、何とか云つてらつしやらなかつた？」

「平氣よ。——きのうだか早速着て出かけたわ」

多喜子は、ちょっと躊躇していたが、やがて、

「実は私、こないだのあの方たちの話、余り妙な気がして……」

と云つた。

「私の仕立屋さんとしての面でだけ受け切れないようなところがあつて」

と苦笑した。桃子は、とつさに何のことか見当がつきかねる風であつたが、

「ああ」と、軽くうなずいて、

「あのひと達ああのよ」あつさり煙草の灰をはたいた。

「そう云つてしまえばそれつきりみたいなものだけれどさ。——私桃子さんの生活が、やつぱりああいう空氣の中にあるんだと思うと、それでいいのかしらつて気になるわよ」

「大丈夫よ、原さんたら！——相変らずねえ」

どこか微かすかに誇張されたところのある快活さで桃子は陽気に多喜子の背中をたたいた。

「私は私よ。お互があれで幸福なんだから、はたでかれこれ云うに及ばないのよ」

私は私と桃子がいう、その気持の内容がはつきりせず、謂わばそんなに手際よく自分だけ複雑な生活の中で別者のように云つていられる心持が多喜子には納得ゆかないのであつた。桃子のそういう態度は大変怜悧なようで、その実自分の心持を見守る手数をどこかで省いているか、投げてているかのように感じられるのである。

音楽も抜群であるし、絵をかかせればやはり目をひくだけの才氣を示し、人の心の動きを理解する力も平凡ではないのに、桃子にはとことんの処へ行くとすらつと流れてしまうものがあった。一本気なところのなさが、桃子のいろいろの才能をも、つまりはちゃんと実らせない原因のようであるし、多喜子はそのことをもやつぱり桃子の毎日の境遇どきりはなして見ることは出来ないと思うのであつた。

頭脳の明敏な愛嬌にほんのぽつちり面倒臭さを露わに示したうわてな親密さで、桃子は、「さ、あなたはどつちへ帰るの？　きょうはあなたの護衛の騎士になつてあげるわよ」

「ありがとう。でもきょうはいいわ、五時に日比谷で原に会うの」

「ハハア」桃子は抑揚をつけてそう云いながら大きく頸をひいて芝居がかりの合点をすると、手にもつていたベレーを振つて、シラノ・ド・ベルジユラツクが舞台でやるような挨

拶をした。

「じゃ私さつさ」と消えるわよ、さよなら」

ヴエランダの降口まで足早に去つて、桃子はそこからもう一度こつちへ顔をふり向け、腹立ちより寥しい気分で遠ざかつてゆくその姿を見送つていた多喜子に向つて、手をふつた。

シモーヌ・シモンがディアンヌという裏町の娘に扮し、ジエームス・スチュアートが道路掃除夫のチーコになつてゐる「第七天国」という映画も、バーバラ・スタンウェイツクの出演しているもう一つのも、どつちも背景に歐州大戦時代をとりいれた作品であつた。多喜子は並んでいる参吉に、

「何だか古くさいわね」と囁いた。

「うん」

場内が明るくなつて、間奏樂の響いているとき参吉は、「変な工合に現代の空氣を反映してゐるみたいな作品だな」と云つた。

丁度燈火管制の晚であつた。二人は市電の或る終点で降りて、一斉に街燈が消され、月

光に家並を照らし出されている通りを家まで歩いた。

ふだん街の面をぎらつかせているネオンライトや装飾燈が無く、中天から月の明りを受けて水の底に沈んだような街筋を行くと、思いもかけない家と家との底合いから黒く物干が聳えて見えたり、いつもとは違う生活的印象的な風景である。とある坂の途中に近頃開拓された分譲地のところへ来ると、彼等は思わずどつちからともなくそこへ立ち止つた。

「何で感じでしよう！」

截りたての石で直線に畳まれた新しい石垣の層々の間に隈なく月が灌そそいでいて、柔かい土の平らな湿つた黒さ、樹木の濃淡ある陰翳が、燐く石面の白さと調和して、最も鋭敏な
ブラック・アンド・ホワイト
黒　　白　　の版画の効果で現れている。

多喜子は参吉の腕をじつと自分の胸にひきよせて、息をのむようにこの冷たい、荒い、夜景の美しさに見とれた。

「思い出すわ、私。——ほら、私たちが一緒になつて間もなく、大塚の公園へ行つたとき、何かの工事で、やつぱり大きな石がちらかつているところを上から月が照していたことがあつたでしよう？」

多喜子は、こんな夜を参吉と歩いて行く心持を足から、眼から、円い輪廓を示し出して

いる体じゅうから味わいつくそうとするようであった。

「おい、大丈夫かい？ 月になんか憑かれたって知らないよ」

「大丈夫よ、今度は自信があるんだから」

家の近くの横通りに曲ると、暫くだまつて歩いていた参吉が、腕によつている多喜子の手を自分のもう一方の手で持ち添えて、もつと深くかけさせながら、静かに云つた。

「——なるだけ俺がよばれないうちに生んじやえよ、ね」

もつと路が狭くなつて、はずれた石の溝蓋どぶぶたなどがあるところへ来ると、参吉がそんなものを用意しているとは思つてもいなかつた懐中電燈を時々つけて、月光が樹の枝々で遮られている多喜子の足元を照らしてやつた。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第五巻」新日本出版社

1979（昭和54）年12月20日初版発行

親本：「宮本百合子全集 第五巻」河出書房

1951（昭和26）年5月発行

初出：「新女苑」

1938（昭和13）年1月号

入力：柴田卓治

校正：原田頌子

2002年4月22日作成

2003年9月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に作られ

ました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

二人いるとき

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>